

## 明治期の来日外国人の日本観（四）

針 生 清 人

一

来日する目的が何であれ、来日する者はその職業上の関心や知的な好奇心から日本観察を行ない、日本理解を深めようとしている。また来日に当っては日本語の獲得を初め数少ない日本紹介書を読むなどの事前準備を

かなり周到にした者も多い。来日後は各々の関心に従って鋭い日本観察を記録する。その記録するところは実に多岐にわたっており、それぞれが秀れた日本紹介となっている。しかし何れにしても、当時、来日する者にとつての日本紹介書は少なく、誤りに満ち、時には古くさくなくなったものであった。それだけに日本は彼らにとってなお未知の国であった。状況は「日本はヨーロッパにとつてみれば新しい国、ごく最近になって諸外国に門を開き、初期に訪れた人々の物語るることによつてのみ知られる国だった。……語り手たちは発達した文明、特異な政治機構、ヨーロッパ中世の封建制を思わせる社会形態を決ま<sup>(1)</sup>って口にするのだ<sup>(1)</sup>」というものであった。それだけに、彼らの目を最もひいたのは日本の風俗人情であり、

宗教であり、政治であった。政治に関しては、開国以来通商条約をめぐって交渉がなされる中で次第に浮上してくる幕府と朝廷の関係である。天皇と將軍の関係は彼らにとつて理解せねばならぬ日本の特殊事情であり、彼らの多くはこのことを理解するため日本の歴史理解に進み、そこから封建制成立までを論じている。

ラザフォード・オールコックも英国の総領事兼外交代表として日本の政治機構に関心を寄せていたが、「日本の政府については、その実際の機構にかんしても、われわれはまだあまりよく知らない。それを構成している権力者——天皇・大君<sup>ミカド・クイーン</sup>およびそのそれぞれの高官たち——の相対的な位置や比重や影響力など、これから調べなければならぬことばかりだ」と述べており、二人の元首、封建諸侯、その相互関係、君主に対する関係、人民に対する関係を「とくに注意ぶかく考慮する必要がある」ものと見なしている。それはこれらの関係が「政府の精神的な要素」をなしている<sup>(2)</sup>と見るからである。そして公式、非公式の筋から集めた情報によつて「政府の行政機構と、大君政府の役人たちのあいだにある階級制度については、わた

しはさまざまデータをもっている」と言いきるまでになるのである。

先ず、オールコックは日本の現実を「一種の封建的貴族制<sup>(3)</sup>」と見て、ロンドンディア公国(六世紀イタリア北部)七七四年)、メロヴィンガ王朝(四八一―七五一年)の如く特定の家から王を選んだころの状態を思わせるものがあり、また豪族から支配権を享受していた点ではサクソン時代やブランドジネット朝初期のイギリスの状況に似ていると見ている<sup>(4)</sup>。

天皇<sup>ミカド</sup>に関しては、「帝国の最初の最高の統治者から中断することなくつづいている世襲の尊厳をもっているばかりでなく、日本の伝承では、その先祖をさかのぼると神にまで達するとされている。かれは、中世の法王の不謬制や権利と、後の時代の元首の世俗的権利とを一身にかねそなえて」おり、「頼朝」が政権を奪ったとき以来、「ちょうど法王のように、実権のすべてではないにしても多くを失つた(同書二二頁)と、法王に比して理解している。このように理解把握するのはその他にも見られるが、江戸幕府を鎌倉幕府の継承と見なすためか、撰閣政治にふれることがあっても、そこに力点を置くものは少ない。しかし何れにしても「最高の尊厳・地位・神聖・大権が天皇<sup>ミカド</sup>だけに属する」「認められた唯一の君主としてすべての領主の上に立つ」という理解に立っている。

これに対して、將軍に関して、条約では「大君<sup>オウキョウ</sup>」となっているが一般的な称号としては「將軍または大將軍」であり、「行政長官の権力を篡奪」した家康以来、その子孫が「代々その権力を相伝し、ときの天皇<sup>ミカド</sup>からさまざまの称号を受け」ている。それは、「最高長官ないし軍司令官」を意味する中国語の大將軍に由来するらしいし、「日本人は、軍人の国民」ということになつていたので、「軍隊の長は実質的に国民の長」となるということだ

としている。この点から、將軍が実質的な支配者、権力であり、天皇は神聖な権威であるとの認識があった。それは、大君王朝(幕府)が変つても、天皇<sup>ミカド</sup>とその相続者には何らの変化もなく、「かれらは神権によってその名目上の主権を継承し、今日でもなお昔の無制限の絶対権の名残りをいくらか保持」していること、しかもその残されているものとしては、將軍職その他の官職に対する序任、新条約批准等に注目している。それは、特に外交官として条約締結に關つたオールコックにとつて、天皇が鎖国の下で新条約批准を行なつたことがなかつたということよりも、条約調印を困難にしているという事実が問題であつた。条約批准に關して、「天皇の認可が欠けていることが、日本におけるわれわれの困難の根底にある」と信ぜられる。大君がある種の圧力から「この必要な君主の認可をえないで、その命に反して条約を締結したらしい。だからこそ大君<sup>オウキョウ</sup>は条約を日本中で施行させることができないのだ。この認可がなく正式な批准がないために、かれはせいぜい開港場のある自分じしんの領内で、自分じしんの臣下にたいしてのみこの条約を実施させることを要求できるにすぎぬ」と現況から推論したのである。

以上のような日本認識からオールコックは次のように結論を下だした。すなわち「この国は封建的な基盤の上に立つて統治されていること、世襲の元首が二人おり、ひとり神権によって元首となり、もうひとは実力を背景にして政権を奪っていること、さらにこの後者の方を抑制するものが二つあり、ひとつは古来の慣習や法律にたいする傳統的尊重で、もうひとつのより大きな力は、名目上は服従を誓つてはいるが、実際はかれに反目し続けている世襲の大名である」「天皇<sup>ミカド</sup>と、衰えたりとはいへその権力

は、いぜんとして存在しているかも知れない。結局大君は、かれの主君の命令の保護のもとで統治している行政長官にすぎない」というものである。

そして日本の統治の実情を「かろうじてつながっているばらばらの支配の糸のすべて、すなわち三〇〇あまりの公国と、領土をもった三〇〇名の小大名がひとつにまとまって日本の第二の支配者にいたり、さらにかれをとおしてすべての者と上に君臨する宗主がこれを弱々しく掌中ににぎっている、ということになる。これら多くの支配者すべては、それぞれに統治し、支配し、われわれにとってはあらゆる統治立法の権力を雑多によせ集めたと思われるにちがいないものを、相寄って形成している」と見てとっているのである。

オールコックの後任としてイギリス外交を代表して幕末から維新にかけて（一八六一—一八八二年）日本に滞在したアーネスト・サトウも、「私の関係して来た事件の中で、最も興味の深いエピソードだけを述べるのが目的」としながらも、巷間に見聞したことを含め幕末から維新にかけての日本の歴史の変動とその背景を記録している。

彼は、日本の君主政治の歴史を辿って「他国から侵入者がやって来て、純然たる神権政治を行なったのが、そもそも君主政治の始まり」とし、その後の武士の勃興、頼朝による封建制度の樹立によって「朝廷の職能は好古的な研究題目たるに過ぎないほど忘却され」たことなどを記述して江戸幕府の成立と幕藩体制、幕府の組織、幕府の崩壊、維新の実現を略述している。しかし維新政府の成立以後の日本を見ていたサトウは、独自の解釈を行なっている。

幕藩体制にあって、大名は相互に交際がなく又世間と没交渉であった。さらに世襲制度の弊害は家老たちにも同様の影響を及ぼし、結果的には「自分の才能で役職を得た下っ端の役人どもの、目に見えない手であやつられ」るに至ったということにサトウは特に着目して、幕府の崩壊、明治維新の淵源はこのことであつたと認めている。しかし当時の西洋人は一般に「將軍が政治上の主権者であつて、御門、すなわち天皇は、単に宗教上の頭首、ないしは精神界の皇帝に過ぎないのだと、当時はまだそのように信じて」いたという。それは十八世紀初頭に「二人の主権者の一方を宗教上の皇帝、他方を俗界の皇帝」とケンペルによって報告されて以来、例外なく踏襲されたもので、「古い知識と何ら変わるところがない」上に、そのような誤った見方からは当時の趨勢を見失った維新観が出て来ると批判している。それは維新戦争を「主権者たる將軍と一、三の手に負えぬ大名との間に政治闘争」として起つたものと見るもので、「將軍が無力でその閣老が無能なため、宗主たる將軍家を無視するに至つたそれらの大名が、神聖な日本の国土を『夷狄』の足で侵させ、貿易による利得をすべて国家の頭首たる將軍家の手に収めさせるような条約に対して不満をいだいたために起つた闘争」というような見方に止まると批判するのである。事実はそうでないサトウはいう。

サトウは一八六二（文久二）年に来日したが、「この時代に、一八六八年の革命ともいふべき事件にまで発展する運動が、すでに始まっていた」という。すなわち当時の状況は、「大名の行使する権力は、単に各目上のものに過ぎなくなり、その実は家臣の中でも比較的に活動的で才知に富んだ者（その大部分は身分も地位もない侍）が大名や家老に代わって権力

を行使するようになったとき、驚くべき一八六八年の革命が出現したのである。藩内を事実上支配し、藩主の政策を決定したり、公けの場合に藩主の発言すべき言葉を進言した者は、これらの人々であった<sup>12</sup>。こののであって、維新に向う動きがこのような人達によるもので、突然のものでなかったことを指摘している。

## 二

しかし、サトウが指摘するように多くの人は、サトウの見方とは異なる。例えばロシア正教会司祭ニコライは次のように述べている。「日本の天皇朝（インペリアルスカヤ・チナスチャ）は、東洋のほとんどの国においてそうであるように、その祖は神に発するものであると見なされている。

しかし日本の天皇は、われわれが常に専制君主（デスポート）という言葉にこめるような意味での専制君主であったことはかつて<sup>13</sup>。また武家政治についても、「これが専制政治と言えるだろうか？ 一切抗言のできぬ服従と盲従はどこにあるのだろうか？ 試みにこの国のさまざまな階層の人々と話を交わしてみるがよい。片田舎の農民を訪ねてみるがよい。政府について民衆が持っている考えの健全かつ自主的であることに、諸君は一驚することだろう<sup>14</sup>」というように日本の封建社会の実態についても見方は甘いというべきである。ニコライに云わせれば、日本の民衆は「ヨーロッパの多くの国々のに民衆に比べてはるかに条件はよく、自分たちに市民的権利があることに気がついてよいはずだった。ところが、これらの諸々の事実にもかかわらず、民衆は、自分たちの間に行なわれていた秩序になおはなだ不満であった<sup>15</sup>」だけであり、役人に対する軽蔑を強く示す

民衆は「この国の貧しさの責任は政府にあると、口をそろえて非難している……それでいて、この国には乞食の姿はほとんど見かけないし、どの都市でも、夜毎、歓楽街は音楽と踊りで賑わいにあふれているのである。これが支配者の前に声なく平伏する東方的隷従だろうか？」<sup>16</sup>。というのである。

しかし、これとは全く正反対に日本の封建制の厳しさを強く述べる意見もある。プロイセンのエルベ号艦長ヴェルナーは、「一般民衆は、大名であり、武士であれ、すべての高官に対しては、まさに屈従に等しい畏怖の念を抱いていた。そればかりか、こうした隷従の状態は二つの異なった言語とさえいえることができるような異常な言語体系をつくりあげた。まず身分の高い者が低い者に対して用いる言語は、苛酷で鋭く、粗野であるが、他方、身分の低い者が高い者にたいして用いる言語は、柔和、快適<sup>17</sup>と述べて身分格差の大きいことを指摘する。しかも、そのような封建社会の中で「日本人は貧しく、自立できず、専制支配の抑圧下に置かれる<sup>18</sup>」が、それは日本全体を強力にしばりつけるスパイ組織、密告制度によるものである。「幕府のスパイ組織は、すべての行政面において上から下まで浸透している。あらゆる役人の傍には公儀のスパイがいる。しかしどのスパイにもすべてを詳細に報告する義務のある別のスパイによって監視されている<sup>19</sup>」という実情がある。そしてこのような手段によって維持される日本の封建社会は二人の支配者をもっている。その一人は宗教上の支配者で外見上の権力しか持たぬ天皇であり、他は世俗的な皇帝で実質的な権力をもつ大君であると見ている。しかしこの実質的な権力を有する大君も臣下の諸侯によって著るしくその権力を制約されているので、將軍は「国土のせまい部

分においてのみ、真の支配者として君臨しているにすぎない<sup>(20)</sup>のであるとし、將軍と大名の關係を中世ドイツの封建的君主關係に比している。

そして封建領主たる大名は「従来の鎖国の組織の担い手であり、したがってヨーロッパ人の敵対者<sup>(21)</sup>」と位置づけられている。しかしこれらの封建社会の為政者もかなわぬものがあるという。それは「世論」である。「日本でも国家の中に將軍やその家臣ですらおそれている勢力、世論があるということだ。しかも絶対專制的支配が行なわれている日本において、個人は時には立憲的ヨーロッパの諸国よりも多くの権利をもっていた」ことに着目している。そのことの故に、日本の未来については明るい予想をもつのである。三五〇〇万の人口しか持たぬ小国日本も「五〇年後にはアジア全体でもっとも豊かで、もっとも幸福で、しかももっとも強力な国になり、中国を凌ぐ国になるだろうと確信」するのである。

これに対して、「信仰上の皇帝・世俗の皇帝」という二人の支配者論に対して疑問を呈する見方がある。露艦ディアナ号艦長ゴローニンは一八一一年、千島測量中に捕えられ二年三ヶ月にわたる監禁されていたが、付添いの通訳、番人との会話から聞き取ったものを記録している。記録に当たっては、同一の事柄について話がくい違ふとき、同じように話されたことを重視しての記録であった。

ゴローニンは「信仰上の皇帝・世俗の皇帝」の呼称は不適當であり、世俗的皇帝を「単に日本皇帝と称すべき<sup>(22)</sup>」だという。將軍こそが「一つの権力下に統一された多数の大名の領地からなる国家の專制的支配者である。一口に言うなら、彼はヨーロッパでなら皇帝という尊称が与えられるような王者」である、いうのである。

天皇に関しては、「信仰上の皇帝」に相当する名称は、位は「世界中にただ一つ、日本固有のものである。我われの概念による皇帝という称号とは全く矛盾する」という。その理由に、信仰上の皇帝は国政の秩序、進行に何一つ関与しないこと、国内に何が起っているのかさえ知らないこと、諸侯なみの所領を有するものの軍隊をもたず治安は世俗皇帝の負担であること、その権力は日本各派の宗教の神官僧侶に及ぶとはいふものの日本の国民の一部で布教されている宗教の宗主に過ぎぬ、ということ挙げている<sup>(23)</sup>。そして世俗の皇帝と信仰上の皇帝の關係を、贈物と威嚇によっていめこむキリスト教国の国王とローマ法王の關係に類似していると述べている。

従つてゴローニンは、彼が唯一の「日本皇帝」と見なす世俗の皇帝とそれが行なう武家政治にのみ関心を寄せていくのである。將軍は「世俗的な事に関する皇帝の権力を壊滅し、統治権をわが手におさめてこの職を自分の家の世襲とした」ものの子孫である。

天皇と將軍の關係に関していくつかの見方があるが、それに沿つて日本の封建制、武家政治、政治機構が採り上げられる。そしてこのような記録に基づいて、後継者は「維新論」、さらには明治に新たに確立される天皇制について論じて行くのである。

### 三

開国によって来日するのであるから、その開国そのものについてもその原因を推測している。しかし、当時の日本人の大半が外圧を論ずるのに、彼らは概して外圧を単なるきっかけであつて、既に開国を必然とする内的

な原因が様々にあったことを指摘して、開国の内発説を採る者が多い。

フランス海軍士官アルフレッド・ルサンは下関砲撃戦に参加し、攘夷の實力行使を体験した上で開国の原因を次のように認めている。(1)幕府は外圧の恐怖に駆られ、事情をよく把握し態度表明ができるまでの時間稼ぎとして温和な政策を取り始めたこと、(2)外国貿易と西洋文明との接触が国益に適うと考え出したこと、(3)幕府のみに貿易利益を確保し幕藩体制を維持しようとしていたこと、を挙げている。そして、開国をめぐって「二つの要素」が現れていたと見ている。その一つは、保守的で、鎖国を目ざすもの、第二は企業精神、商業熱、哲学思想をもって大陸に移住した者と同じような人々の登場、だという。しかも鎖国を貫くための攘夷論も果して鎖国を目的としたものであったのかどうか疑問も出て来る。所謂「尊皇攘夷」のスローガンも「おそろく幕府を苦しめようとするのが目的だったに違いない<sup>(24)</sup>」というものである。その理由は、このスローガンの主唱者である薩摩藩は攘夷を唱えながらも、「先鞭をつけて、自分の領土に西洋の技術を採り入れ、外国の機械を握え付け、外国人の技師を雇った事実からみても、この推測に誤りはあるまい」というものである。しかも薩摩藩は、薩英戦争の敗北から、日本よりもはるかに強力で文明の進んだ国が存すること知り、それらの列強に当るには各藩が連合する必要があるとして「諸藩連合」論となる。しかもそれは無力な幕府のなし得るところではないので、一日も早く幕府を倒し、天皇が直接の支配権を握るべきだとして「討幕」論となり、維新戦争へと至ったというのである。

中国人留学生の載季陶も、「真剣に日本研究に関心を向けるべき」だと考へ日本の全体像を捉えようとしており、攘夷、開国、王政復古を辿り、そ

の原因を次の様に捉えている。(1)徳川幕府自体の腐敗、(2)幕府および諸藩の財政難と幕藩武士の生活難、(3)外国勢力の圧迫の激化が攘夷討幕の感情をひき起したこと、(4)西南雄藩は幕府に対する不満をいだき機会を伺っていた。これらの雄藩は地理的に海外にも京都にも近く「尊王攘夷」の中心となった。(5)徳川執政以後の古学派神権思想の普及、および漢学の発達に与えた影響、を挙げ、次の様にいう。「要するに当時の幕府および諸藩の情勢は、すでに窮極必変の時代にあった。たとい外来の諸原因がなかったとしても、幕府の権力、諸藩の地位は、すでに搖ぎはじめていた。そこへたまたま欧米の勢力が猛然としておし寄せて来た<sup>(25)</sup>」と。さら載季陶は「攘夷」についてもユニークな見解を示めている。攘夷思想は外圧によって生じたが、この外力の圧迫は二種あった。すなわち「一つは北からの、ロシアの政治的圧迫であり、一つは南からの、欧米各国の商船の来航<sup>(26)</sup>」である。従ってこの二種の圧迫に対抗して起った攘夷思想は内容、方向ともに異なっている。ロシアに対抗して生じた攘夷思想は「過激であり武力的であった」が、欧米諸国の来航に対するそれは「打算的で経済的」であったという。この二つに異なる傾向は、「その後の開国進取の思想にも異なる影響を与えた。さらに、明治時代になって、日本の国防政策、外交政策を支配した北進と南進の二つの潮流も、この二つの傾向と密接に関連がある<sup>(27)</sup>」ことに留意せねばならぬというのである。

しかし討幕という戦争から始まったが故に、明治維新は、「農民階級を解放し、農民が土地所有権と、政治および法律上の地位を手にする結果をもたらしたが、この運動は、農民の自発性で起ったのではなく、やはり武士階級の中から多くの志士仁人が鼓吹することによって起った<sup>(28)</sup>」ことに着目

している。そして明治維新の民衆欠除という点から、階級闘争理論が革命史の實際に合わぬ例と見なしているのである。

このような民衆欠除の維新観に対して、維新の歴史的前提を探ぐって、「民衆」に着目したのがレフ・イリイチ・メーチニコフである。「単一農業国における唯一の生産階級である農民は、貴族的な上層人種を構成する寄生的階級の圧迫を受けて、極度に喘いで」おり、「貧困階級というべき労働者あるいはプロレタリアートは、農民以上の窮乏状態に立たされて」おり、人格すら持てぬ状況に置かれていたが、封建的圧制からの解放を求めていた。大塩平八郎にひきいられた「社会の最下層身分の人間たちの民主的な反乱」の勃発も重圧から必死に出口を求めての「民主的蜂起」であるとの見解を示している。一般的に日本の農民は「自分たちの生活圏外で起すすべての事柄に冷やかな態度をとる、孤立した世界を構成しており、彼らはあらゆる新制度に不信感を抱き、滅多なことでは動揺しないが、ひとたび動き出すとみずからの権利を徹底して守りぬくことができる」存在であるという。<sup>(29)</sup>

メーチニコフはイタリア統一を求めるガリバルヂの解放闘争に参加し、ナロードニキ主義のゲルツェンやバクーニンとも交り、一八七一年のパリ・コンミュニオン時には救援活動に従事した革命家であり、その立場から維新の中に「民衆」の役割を見ようとしたことは容易に推測できる。彼は一八七二年ジュネーブで大山巖、木戸孝允、高崎正風らと知り合い、その関係で一八七四年に来日するが、その途上、シンガポールで耳にしたのは旧知の岩倉具視襲撃事件、佐賀の乱、台湾遠征等の風聞であった。これらの「断片的な諸事実をつなぎ合わせ、そこからなにか役に立つような一般

論をひきだすことなど」できず、反って「こうした事態全般、とりわけ日本の六八年革命のことが、ますます理解できなくなる」のであったが、「ただはつきりしていたのは今まさにわたしが直面している困難な事態は、この革命の直接の継続であり、すべてはそこから必然的に発している」ということを察知するが、明治維新の理解に本質的矛盾があったことも知るのである。それ故、彼は維新理解の正確を求めるのである。

当初メーチニコフが理解したことは、西欧人目撃者の諸証言による表層的なものであった。すなわち、維新とは「世襲独裁者すなわち將軍が、諸外国と通商条約を締結し、そのことが賢明なる権現様の基本法規の一つを破ったことから起った」というものであり、メーチニコフが理解できぬのは、このとき勝利した尊攘派が「日本そのものをヨーロッパ風の国家にしたてあげよう」としていることであった。そしてヨーロッパのジャーナリズムも「日出ずる国の自由主義的改造の原因を若き新帝睦仁の意思によるものと考え」ており、「この皇帝のなかに、ピョートル大帝を見ていた」が、このような解釈はなり立たないと、欧米人一般の維新理解に疑問を呈している。

メーチニコフの疑問あるいは異議は、日本では「京都に住む皇帝も、江戸を都とする軍事独裁者（將軍）も、それ自体はなんの政治的意義を有さず、国民と国家の運命を自分一人の裁量で動かすだけの物質的可能性を持っていなかった」ということに基づいている。そしてメーチニコフは、「一般にヨーロッパ人というものは、外からの強制的な開国が日本におよぼした意味を誇大視する傾向が強すぎる」といい、日本の開国に対する欧米の介入の意義を過大視することに批判的である。実際は、「六〇年代のこ

の国の改革運動(それは今なお終息せず、最終的なかたちをみていない)は、主として純粹に土着的な所産<sup>(33)</sup>であり、「外からのいかなる干渉とも無関係な、純粹に土着的な諸事件と密接に絡みあった重大なエピソード<sup>(34)</sup>」だと見るべきだという。

しかも、日本の歴史を見ると、「因循や停滞」という烙印を押すことはできない。「この国の歴史は独自の進歩と発展をみせており、まさしくこうした国内生活の順調な流れがあったからこそ」、ペルリ来航よりも「三十年も前に、非常に根底的な政治、社会上の変革を必要とする状態にまでたち至っていた」と見ている。それ故、メーチニコフは、「日本の後進性やアジア一般の政府の専制的性格という偏見に立って、遠くヨーロッパから日本の事態をとやかく言っている連中などには想像もできぬほど、日本では政府が世論を考慮しなければならない」と、世論||民衆の声の強さに着目するのである。

また幕府という独裁政権は衰退するが、それについても内部崩壊説をとっている。それに関して彼はトルコと日本という東洋の二つの辺境に起きた変化を比較している。トルコでは国家という有機体が内部的疲弊による全身麻痺で慢性的解体をし、全てが崩壊するのに対して、日本では急速かつ絢爛たる再生を見せ、全てが蘇生し、鞏固になって行く。伝統的な庄制を放擲し、新たな改革の道へと踏み出した。それは「歴史上われわれが知り得るもっとも完全かつラジカルな革命<sup>(35)</sup>」命であった。封建制の廃止と全統治機構の改編にはじまり非常に広汎な国民教育の組織化にいたるまで、この急激な改革のなかで、手をつけられなかった社会的、政治的習俗の領域はひとつもない<sup>(36)</sup>」ほどの大革命であるという。

彼は来日以来、日本国内の発展の興味ある瞬間を目撃して「どこへ行っても高度な文化、文明の成果を積極的かつ自覚的に摂取しようとする新たな力強い生命が、こんこんと湧き出でている<sup>(36)</sup>」という。さらに驚くべきことは、つい最近まで支配階級の専横が唯一の国法<sup>(37)</sup>というような社会体制であったのに、「日本の生活のもつきわめて民主的な体制<sup>(37)</sup>」である。しかしこの様な社会体制に急激に移行することはあり得ない。そのような体制に移行するにはすでに何らかの萌芽を内包していたというべきである。すなわち、「ヨーロッパ文明が日本と出会った時、そこでは封建制というものがすでにその主要な任務を果しおえ、(つまりはみずからの歴史的意義を喪失し)それは進歩的な国民的自覚が必然的にむかうべき形態ではなくなっていた<sup>(38)</sup>」からである。

## 四

メーチニコフは明治維新の「民衆史観」ともいうべきものを述べるために、日本の歴史と幕藩体制等についてかなりの程度で論じている。彼は『回想の明治維新』において日本の歴史を次の様に扱っている。日本文明の黎明期は「中国の民主的中央集権制」(一五八頁)を採った西暦七、八世紀である。中央集権制は日本民族の太古からの「連邦主義的な志向と伝統」と突き当って幾度となく挫折するが、次第に原始的な連邦主義も徐々に形をととのえはじめ、「ロシアの分領・民會制度、いやより正確には西ヨーロッパの封建制度にひじょうに似かよった歴史的体制をとるに至る<sup>(39)</sup>」(一五九頁)ったという。彼は藤原氏、平氏、源氏の歴史を概観して「地方勢力」の台頭に着目する。また、庶民の芸術の発展から「西暦十二世紀になると、

この国の人民大衆の少なからず自主的な行動を前提とするような一定の変事が完了していた」(一六五頁)と民衆のもつ力に目を向けている。

鎌倉幕府は武家政治を通して封建社会を形成して行くが、天皇制を「日本民族の生ける象徴シンボルの役割」として残し、以来、「天皇は国の日常生活には直接に関与することはな」くなった(一六九頁)。

日本の平和を「確固たるもの」にしたのは徳川家康であり、彼が制定した「百箇条」がその後の基本法となった。それは復古的で「きわめて慎重な保守主義の産物」(一七八頁)であるが、頼朝から「国家制度の在地主義ゼイムスキイ」の性格ばかりか、国家機構「まで借用したものである。その国家機構は、皇室や官僚的中央集権制と、諸大名の独立、農村共同体の自治や経済的保障と地方貴族による政治的、経済的支配といった「たがいに排斥しあう対立原理」(一七八頁)によって支えられていた。

この徳川時代こそ日本に「国内的平和」を実現し、「実り豊かな結果」をもたらし、ヨーロッパ先進国にも見られぬほどの「物質的豊かさを急速に達成したが、相互に排斥し合う「対立原理」に基づく限り、国内平和そのものも「一風吹けば屋台骨が揺ぐほど不安定な均衡の上に成り立っていた」(一七八頁)のであり、社会秩序も「原理的にはおそろしく不安定」(一八二頁)であった。従って、複雑な政治、社会上の諸問題を体系的に解決して行くのではなく、無数の個別的な駆け引きや策略によってもたらされた均衡状態は早晩くずれ去るのは必至であったという。

この様な不安定な秩序に対する不満が、日本の社会各層で一気にあらわれて来る。その急先鋒が西南雄藩であり、「独裁者の錫杖を、帝位のもとに返すべき時が来ている」「天皇権力を太古の神聖さと純粹さにおいて復活

すること」(一八四頁)をスローガンとするが、西南雄藩だけでなく、このスローガンの下に集るものに、徳川家の近親者までが交っていることにメーチニコフは驚くとともに、現行秩序に対する不満の大きさを見るのである。この尊皇派の台頭によって、幕府権力は弱体化の一途を辿り、「当初握っていた在地的性格と、農民大衆のあいだでの人気をまったく失なってしまう」(一八五頁)ことを指摘している。

幕藩体制下の日本にはヨーロッパ的な意味での都市市民は存在しないが、「この国でのプロレタリアートの役割を部分的に担ったのは、……虐げられた身分カステの人たち」であり、彼らも「自分たちの政治、社会的状況が時代の精神にそぐわないものだということに気づきはじめていた」(一八五頁)のであり、メーチニコフはこの点から、明治維新が内発的でも民衆の力にも負うた一種の市民革命であったことを論証しようとするのであるが、そのためには市民、あるいは第三身分に相当する者が存在しなければならぬ。

先に書かれた『亡命ロシア人の見た明治維新』(一八七六―七七年)では、社会階層を論じて、「華族」を称号貴族、「士族」を無称号貴族とし、「日本の第三階級を構成したのは商人であった」(四二頁)、「第四の貧困階級ともいべき労働者あるいはプロレタリアートは、農民以上の窮乏状態に立たされていた」(四二頁)と述べている。しかし商人階級は明治維新に無関心であったとしてるので市民革命の担い手にはなり得ない。<sup>39)</sup>

後に書かれた『回想の明治維新』(一八八三―八四年)では、「日本でフランスの第三身分にあたる役割を果したのは、大名につかえる小貴族シヤウキョクつまりサムライと、将軍の親衛隊ともいべき旗本」(一八六頁)だとしてい

る。彼らの経済状況は悪化していたが、無為徒食の生活を送ってはいた。しかし「医者、通訳、学者、芸術家などが出てくるのも、これら下級武士のなかからなのだ。彼らのうちの最良の人々は、日出ずる国で唯一の公認の学問だった中国式の古典主義の無益さをとくに悟っていた」(一八六頁)のであって、彼らこそが「洋学」を通して、斬首をいともわぬ覚悟で、ヨーロッパ文明を求め始めた者であったという。これら「下級武士」が洋学を求めたということから、「要するにわが文明が完全武装の軍艦の姿をまとうて日本近海に出没し、日出ずる国での市民権を執拗に要求するよりもはるか以前に、日本のほうがヨーロッパをめざしていた」(一八八頁)し、「宣教師の初渡航以来、少数の人々のなかでは西欧科学をもとめる動きは、ほとんど途絶えることがなかったと言ってよい」(二六四頁)、「日本人はわれわれが考えるほど、国外の事情に無知だったわけでもない」(二六五頁)、「誰もがヨーロッパ人から何かを学ぼうと必死」(二六七頁)だったと述べて、日本開国の気運を内包していたと結論するのである。しかもこれらの「下級武士」が維新の原動力となっただけでなく、維新政府の実力となって近代化を果して行く事実から、メーチニコフは「民衆Ⅱ第三身分」の概念に「下級武士」を含めたのだといえよう。

又、前述の如く、メーチニコフにとって、開国を認めた事で幕府に叛旗をひるがえした尊皇攘夷派が、最終的に勝利した時、開国通商の条約を承認するだけでなく拡大解釈を加えて行ったことは矛盾であり、理解し難いことだったが、この矛盾の核心は、「外国人を日本に入れるか否かではなく、長年にわたる日本の秩序全体を保持するか、それとも変革するかにあった」(一九〇頁)と解釈したのである。また西南雄藩は早くから軍隊を

ヨーロッパ式に再編し、軍艦、武器などを購入することを行なっていたのは、「欧米の新制度を時宜を失せず導入することこそ、新たな力になると、はっきり理解していた」からであると見て、「日本のヨーロッパ化とは、ほぼ開国と同時に起った内戦の成行きとはまったく無関係だった」(一九一頁)と結論している。

この様に、明治維新を見るとき、「下級武士」こそが「明治維新の精神」である。維新政府の要職者の大部分は、「この国にあって唯一、ヨーロッパでいうところの第三身分に似た階層で、ひとり国政にたずさわるに足るだけの成熟をとげていたかつてのサムライたち」<sup>(40)</sup>であり、彼らの自発性において進められる維新の事業も単なるヨーロッパの模倣ではなく、「封建制の残滓をできるかぎり根底的に払拭する必要に迫られたから」に他ならない。その最大の成果が「身分制の完全撤廃」であり、「日本では、身分的平等の観念がすでに非常に成熟」し、国家の重要ポストは全ての階級に開られていくという。また、明治政府が商業活動を奨励するのも、身分的平等の観念から必然的に出て来るという。すなわち、生産的労働を蔑視する伝統社会に身分的平等の観念を根づかせるのは困難であるので、最も蔑視された生産労働Ⅱ商業を重視することを行うからだという。

日本のヨーロッパ化、近代化の進め方についても、新奇な物に飛びつく熱中ではなくて、明るく開けた新生活への自覚的希求によっている。西洋文明にひれ伏すこともないし、さりとて西洋文明に目を奪われることもなく、「むしろ自覚的にこの文明のもつ、明らかに優れたところを摂取し、それを自国の国民的財産にしたいと思っている」<sup>(41)</sup>のであり、これによって、異国の国家制度、社会制度を摂取することが必然となった、というのである

る。そして国際文明への参加は、日本の場合、一時的な歴史的偶然性の所産というようなものでなく、日本の生活そのものの不可避的な結果であり、内的必然性に基くものである。従って日本はこの進歩の道から後もどりすることは不可能である、と述べている。

### 註

- (1) 『フランス士官の下関海戦記』前書アルフレッド・ルサン、新人物往来社、昭和六二年
- (2) 『大君の都』(下) 一一四頁オールコック、昭和三七年
- (3) 同前書 一一〇頁
- (4) 『イタリヤ外交官の明治維新』アレクサンダー・ヒュブナー、一三七頁では、「スコットランド北部、インド北部地方」に似ている、としている。新人物往来社、昭和六三年
- (5) 『大君の都』(下) 一二三頁。参照「天皇はこの帝国の世襲の君主であつて、ながいあいだ中斷することなくつづいて来たひとりの王朝の君主たちの子孫にあたり、上は大君から下はこじきに至るすべての日本人の認める唯一の正当な君主——すなわち、君主たる者が有するいっさいの法的な属性を具備した真の君主——であること、大君はその代理者ないし総司令官「征夷大將軍」として天皇から叙任され、その資格においてのみ、行政政府の長である。」(下) 三三七頁
- (6) 同前書、(下) 一二四頁。参照、『マクドナルド「日本回想記」ウイリアム・ルイス、刀水書房、昭和五四年、「日本の政治の基礎は……一つの封建制といふべき……一般的な理念とはびたりとは一致しなかつた」一六一頁
- (7) 『一外交官の見た明治維新』アーネスト・サトウ、岩波書店、昭和三五年、(上) 九頁
- (8) 同前書二七頁
- (9) 同前書四一頁
- (10) 同前書二六頁
- (11) 同前書二五頁

- (12) 同前書四二頁。参照、『ロシア士官の見た徳川日本——続・日本俘虜実記——』ゴロウニン、講談社学術文庫、昭和六〇年、六九頁、付きそい及び番人からの見聞、「現在の日本の統治の形態をあまりよく言つてはいなかった。その最大の欠陥は公方自身が政務を執ることが少なく、目をつぶつて何も見ようとはしないこと、また地方の大名が人々に対し無限の権力を握つてゐるということであつた。」
- (13) 『ニコライの見た幕末日本』ニコライ、講談社学術文庫、昭和五四年、一一〇頁

- (14) 同前書一一頁
  - (15) 同前書一二頁
  - (16) 同前書一三頁
  - (17) 『エルベ艦長幕末記』R・ヴェルナー、新人物往来社、平成二年、五七頁
  - (18) 同前書一八七頁
  - (19) 同前書一一四頁。この「スパイ制度」については実に多くの人が記録しており、そのことから日本人の性格まで論ずるので、例を挙げておく。参照。オールコック『大君の都』「すべての役人は、互いに探り合うように、二人ずつ組んで勤務しており、この制度は日本の政治組織全般に及んでいる。これは、スパイ政治だ。だれもが監視されている。……皇、帝たち「將軍と天皇」じしんも、その例外ではない。」(上) 一三〇頁。「われわれは、あらゆる面で警戒心にみちた監視と制限に出くわすのである。そしてまたわれわれは、多くのスパイや両刀を帯びた役人というような、主人の意のままになるだけの真正正銘の(ヘイヌ)どもに出くわすのである」(下) 七九頁。「スパイ組織や密告をその主な道具のひとつとしてたよりにしているような政府は、不信の種子を全国民のあいだにまき散らし、人と人とのあいだのすべての信頼をくずしてしまい、そのような影響をうけている大衆のあいだに真実も信念もないようにしてしまう」(下) 一三六頁。そしてこれらのことからオールコックは進歩、改善を阻害する要因として、「第一に日本人の封建的諸制度があり、第二には間諜組織にもとづく高度に人為的な健全な政治組織がある」と結論する(下) 一三六頁。
- 『ロシア艦隊幕末訪記』ヴィンセスラフツォフ、新人物往来社、平成二年。「無条件に法を守ることをさらに徹底する目的で、国中が系統的に組織されたスパイ網でおおわれ反乱などの思い描くことすら不可能な状態におかれた」

八五頁。「国政上層部の組織的なスパイ活動の果実であるところの徹底した疑い深さは、おたがいに騙しあい、たがいに恐れと不信を抱きあう「国民的規模の」大組織を発展させた。このような泥沼にあっては、崇高な正義、善を信じる心、理念への献身、自尊心、より高きものを求める心、湧きおこる生の泉であれば何でもかまわない、それなしにはどの国民であろうと次第に衰弱してしまふような、そういう価値あるものをどこに見出したらよいのか!」一八頁。

『ロシア士官の見た徳川日本』ゴロウニン、講談社学術文庫、昭和六〇年、「皇帝は猜疑心が強く国持ちの諸侯を信用していないので、公然と、またはスパイを使う隠密の方法で諸侯に対し嚴重な監視を行なっている」七四頁。「日本の市中の警戒は非常に嚴重で、静謐と住民の安寧のために大変忙しく立ち働いている」九六頁。

『回想の明治維新——ロシア人革命家の手記——』メーチニコフ、岩波文庫、昭和六二年、「三千万国民は上は天皇から下は虐げられた身分に至るまで：日本人全員がただだ敵格に定められた形式どおり動いていた。また誰もが密偵制度や、他国に例のないいわば世俗の異端審問の網の目によって、ひとしくからめられていた。つまりはいかなる自由な動きも許さぬ程度に面倒見のよい、それなりの人道的な庄政が、万民の上のしかかっていた」一七九頁。

『ニコライの見た幕末日本』ニコライ、講談社学術文庫、昭和五四年、「日本中にスパイ網が張りめぐらされ、外国人との接触を排すべく極めて嚴重な方策が採られていた。だが、そのスパイ網はもっぱら各地の封建諸侯を制禦するためのものであり、外国との接触を排したことが、將軍たちの考えによれば(その考えは三百年前には十分正当なものだったわけだが)、この国が外国に侵略されるのを防いだのだ」一二頁。「全体が密偵網の上に成立している大君政府が、そうした宣教師たちの活動を知らなかったとは考えられない」八〇頁。

(20) 『エルベ艦長幕末記』三八頁

(21) 同前書五三頁

(22) 『ロシア士官の見た徳川日本』六四頁。参照。『マクドナルドの日本回想』「至高にして神権を授けた政府の首長としてのミカド(と呼ばれた)を(政治上の)信条の規範として認めつつ……表面上ミカドの神権政治上の優越を認めながら、コボ「公方」あるいはショウゲン「將軍」——實際上の皇帝——の名のもとに、主権の世俗的な部分を引き受けた」一六一頁。

『宣教師の見た明治の頃』H・チースリク、キリシタン文化研究会、昭和四三年、「天孫として崇敬されても名ばかりの支配者であったミカドの代わりに大君と称される將軍が完全な独裁政治を行なった」五〇頁

(23) 参照。『第一回獨逸遣日使節日本滞在記』オイレンブルク伯アルブレヒト、日独文化協会、昭和十五年、「神聖なる天皇ほどの宗教に属せられるかと尋ねたら、天皇は自ら神に在し、唯その皇祖皇宗を拜し給うのみだから、何れの宗教にも属し給わぬと答えた。この事は非常に徹底している。というのは日本人は一般に神々からその源を発して居ると思っているし、又初代のミカドは最後の神の子であらせられたからである」一一三頁

(24) 『フランス士官の下関海戦記』四一頁

(25) 『薩摩国滞在記——宣教師の見た明治の日本』H・B・シュワルツ、新人物往来社、昭和五九年、十七頁。

参照。『日本論』載季陶、社会思想社、昭和五十八年、「オランダの兵学が早くから日本に入っていたので、外国の学問なり実力なりが相当のものであることもわかっていった。口では「攘夷」を唱えても実際はそれができるとは思わなかった。そこでかれらは「攘夷」を唱えるいっぽうで、富強のために積極的にヨーロッパの学問を歓迎した。……だからこそ、幕府がひとたび倒れると、「尊王攘夷」という目標が「開国進取」に一変したのである。攘夷と開国とは互いに矛盾した方向であるが、この矛盾した二つの方向が日本の今日の隆盛の基礎を築くことになった」四五頁。「欧米勢力の圧力は、日本を揺るがし革命を起こさせるきっかけとして作用しただけであって、この革命を短期間に成功させたものは、外からの輸入ではなく、すべて歴史が培ってきたさまざまな能力の発現なのである」三三頁。

(26) 『日本論』四四頁

(27) 同前書四七頁

(28) 同前書二九頁。ちなみに載季陶は討幕の原動力となったとして「浪人」の役割を評価し義和団の性格と比較している。「この義和団の精神なくして独立の文化を生み出すことはできない」四五頁。「日本の改革は、多数である農民もしくは商工業者の思想行動によって起こされたのでなく、まったく武士階級による単独事業であった。開国進取の思想はもとより、……武士階級によって鼓吹された」五一頁。

- (29) 『亡命ロシア人の見た明治維新』四〇頁以下
- (30) 同前書一二六頁
- (31) 『回想の明治維新』六四頁
- (32) 同前書一八一頁
- (33) 同前書六六頁
- (34) 同前書一八一頁
- (35) 『亡命ロシア人の見た明治維新』十六頁
- (36) 『回想の明治維新』九〇頁
- (37) 同前書九一頁
- (38) 『亡命ロシア人の見た明治維新』一一二頁
- (39) 同前書四七頁、「民衆も静かなうねりを起こしはじめていたが、公然たる抗議といふかたちで自分たちの要求を表明するまでには至っていなかった。」
- (40) 同前書六三頁
- (41) 同前書七八頁

(未完)